

序にかえて

I

『木村定三コレクション研究報告書』第2号は「コレクター木村定三研究の基礎資料」と題して木村氏の全著作目録や茶会記録、蔵書目録を特集することとした。

2003（平成15）年の春から始まった約3000点に及ぶ寄贈作品を木村家から美術館へと移す作業が一段落し、ほっと一息ついたその年の秋口、美保子夫人から蔵に保管している木村氏の蔵書についても美術館に寄付をしたいのだがという相談を受けた。それ以前から蔵書の量がどの程度のものかを見知っていたこともあり、即答は避けた。美術館の図書の収納スペースは限られており、またその分類整理や保存管理のための人員も能力も美術館は持ち合わせていないからである。そこで芸術文化センターの、アトライブラリーを所管する部署である文化情報センターに相談を持ちかけたところ、その年の10月に快く一括して受入を承諾してもらうことができた。蔵書のコレクション名は、すでに木村家から寄贈されていた美術品が「木村定三コレクション」と呼称されていたことから、「木村定三コレクション—図書資料編—」とすることになり、翌年の5月に2回に分けてライブラリーの書庫に搬入された。それからライブラリーの司書の方々によって約半年にわたり分類整理がなされ、受入手続きが完了したのは2005（平成17）年の3月のことである。ラベル貼付などの資料装備や書庫内の専用書架への配架を終え、9月には一般の利用が開始された。話の発端からここまで2年の歳月が流れたわけだが、司書の方々には日常業務に多忙の中、木村定三氏およびそのコレクションの研究に必須の重要な資料であるという認識のもとで、黙々と作業を進めていただいたことにここであらためて感謝したい。美術館の学芸員ばかりでなく、多くの研究者がこれから多くの恩恵を受けることとなるであろう。ここではこの蔵書から受けた最初の恩恵について簡単に報告しておきたい。

II

木村定三コレクションには岸田劉生の日本画8点が含まれている。劉生は鶴沼時代の1921（大正10）年に日本画を描き始め、関東大震災後移り住んだ京都時代や晩年に居住した鎌倉時代をとおして数多くの日本画を描き、春陽会や個展などで発表するとともに画会を興して頒布している。1924（大正13）年6月に読売新聞に発表した「私の日本畫に就て」と題した文章では「私は元來は油畫が本職なのだが数年前から日本畫に親しみ、今日ではその方も本職のつもりで仕事してゐる」とし、またその作品は「南畫法」と「院体風写生畫法」との二つの画法に拠るものであるとしている。劉生が遺した日本画がどれだけの数に上るかは今日まで判然とせず、また劉生筆とする日本画にはあやしげなものも含まれることから、岸田劉生研究の第一人者であり、劉生の日本画をこれまでに多く目にしてこられた浅野徹氏に作品調査をお願いした。8点の日本画は以下の通りである。

- | | | | | |
|-----------------------|--------|--------|--------------|---------------|
| 1. 「秋山隱士図」 | 1929年 | 紙本着色 | 125.5×23.2cm | 掛幅（画題：栗） |
| 2. 「厨房新鮮図」 | | 紙本墨画淡彩 | 193.3×22.3cm | 掛幅（画題：蔬菜） |
| 3. 「秋閑小彩図」 | 1929年 | 紙本着色 | 125.8×31.8cm | 掛幅（画題：菊・柿・葡萄） |
| 4. 「王母千年実図」 | 1929年頃 | 紙本墨画淡彩 | 135.3×22.0cm | 掛幅（画題：桃） |
| 5. 「翡翠柳図」 | | 紙本着色 | 134.5×33.4cm | 掛幅（画題：翡翠・柳） |
| 6. 「洛東新緑図」 | | 紙本着色 | 138.0×34.0cm | 掛幅（画題：風景） |
| 7. 「村嬢姿図」 | 1928年 | 紙本墨画淡彩 | 26.9×24.1cm | 掛幅（画題：村嬢） |
| 8. 「清澄茂太郎図」（「大菩薩峠」より） | | 絹本着色 | 120.5×40.0cm | 掛幅（画題：人物） |

上記8点のうち1から6までは南画風の作品で、出来映えに優劣はあるものの、劉生筆として間違いはないであろうというのが浅野徹氏の見解で、7に関しても、昭和2年から4年にかけて日本棋院の発行する雑誌『棋道』の表紙を飾った作品と一連のものであろうとされた。問題は8の「清澄茂太郎図」（図1）である。波の上で鬼の面を頭上にかざして踊る裸の少年が描かれ、画面左上には「四肢婉轉如白蛇奇童裸形蒙鬼面海中奇觀擬海龍神童其名茂太郎」の賛に続き「昭和己巳六月塘芽堂劉生并題」「劉生」白文方印の落款が記されている。また内箱蓋裏には「大菩薩峠 岸田劉生筆 清澄茂太郎図」の題があり、その下に判読できない5字の署名がある。題字と署名とは別人の筆跡で

あり、またいずれも劉生の字ではない。落款の書体（図2）は劉生のものとして間違いはないであろうが、画題といふ浮世絵風の作柄といい、これまでに見た劉生の日本画中に類品がないことからこれを劉生の作とすることに浅野氏は判断を留保された。

III

2004（平成16）年の夏であったらうか、ライブラリーの書庫を覗くと未整理のまま書架に仮置きされた木村氏の蔵書が目にはいった。その多くは美術書であるが、漱石や芥川などの文学全集も並んでいた。そうした全集本のなかに孤立するようにぼつんと「大菩薩峠 第六冊 中里介山」の背表紙が見えた。手にとって表紙をめくると小林古徑の机龍之介の口絵があり、頁をくると「清澄茂太郎……岸田劉生」とあり、先述の問題となった作品が口絵（図3）として掲載されているのではないか。この書物は奥付をみると昭和5年3月15日に特装版として発行されており定価は3円50銭、発行所は春秋社となっている。奥付の裏の頁には第1冊から第7冊の宣伝があり、各冊の口絵作家が紹介されている。第1冊は小川芋銭、山村耕花、河野通勢が担当し、以下石井柏亭、坂本繁二郎、池田輝方、石井鶴三、代田取一、木村武山、小林古徑、岸田劉生、中村岳陵と洋画、日本画の有名画家が名を連ねている。こうした画家の選定が著者の中里介山の意向を踏まえたものであるのか、あるいは春秋社の編集サイドで決められたものであるのか、今ここで判断する材料を持ち合わせていないが、ただ第1冊の小川芋銭に関しては、幸徳秋水、堺利彦が発行する『週間平民新聞』時代（明治36～38年）から親交があり、介山が白柳秀湖や山口孤剣らと創刊した『火鞭』（明治38年9月創刊）の表紙絵を小川芋銭が担当していることからみても介山の意向がはたらいたものであろう。中里介山と岸田劉生との間に何らかの交流があったかどうかは不明である。ただ、『大阪毎日新聞』に連載されていた『大菩薩峠』の石井鶴三の挿絵についての感想を記者から求められ、同紙大正14（1925）年2月1日夕刊に「大菩薩峠の挿絵を見て 新鮮な技法」と題して寄稿している。ただ、そのことをもって介山が劉生に特装版の口絵を依頼する根拠には乏しいであろう。むしろ、劉生と春秋社との関係の密接さに注目すべきかもしれない。劉生が昭和2年5月から6月にかけて『東京日日新聞』に連載した「新古細工銀座通」は、翌年9月に『大東京繁盛記』下町篇に収められ春秋社から刊行されている。また昭和2年に創刊され、武者小路実篤が編集人、劉生が表紙絵や挿絵を描いた雑誌『大調和』も春秋社から発行されている。昭和3年1月19日の劉生の日記には「長唄吉原雀「さうした黄菊」のところをさらつてゐたら春秋社の笹本寅君が遊びに来る。ソバナなどつて、しばらくビールで話して帰る。」とあって、春秋社とはこの頃関係が深かったことが知れる。『大菩薩峠』の口絵の依頼は春秋社からのものであった可能性が高いのではないか。

IV

口絵は色刷木版で、原画のイメージを全く損うことなく、非常に精妙に刷り上げられている。イメージサイズは縦17.8cm横11.8cmで、原画の大きさが120.5cm×40.0cmであるから縦が約六分の一、横が四分の一の縮尺である。そのため人物の位置を原画より高い位置に布置させている。口絵を拡大コピーして、原画と比較してみたところ、書も人物の姿態、線、色彩いずれも精緻に写されていた。驚嘆すべき彫版の技術であり、刷りの技術である。紙数がないため詳述は避けるが、これは劉生がその技術に最も信頼を寄せていた伊上凡骨（1875-1933）の手になるものであろう。伊上は肉筆画を木版によって複製する技術を確立し、劉生はその『劉生図案画集』（1921年、聚英閣）をはじめ、多くの仕事を伊上に委ねているからである。最後に浮世絵風の作風についても簡単に触れておきたい。劉生は先述した石井鶴三の大菩薩峠の挿絵評で「幕末の事件をとりあつかつた小説に挿畫する事となつたために、勢い国貞あたりのものに近よられた事に氏の「技法」を一層確實なものとなすとともに、日本風審美を氏の仕事の上に明確に加へ得る機縁となつた事を喜ぶものである。」と書いているが、劉生自身が口絵の依頼を受けた時に同様に考えたのではないだろうか。そもそも劉生が初期肉筆浮世絵に魅せられ、多くの作品を所蔵し、また研究を重ねていたことは周知のことである。三味線箱の蓋に描いた弾琴図（大正14年、東京国立近代美術館蔵）の存在は、「清澄茂太郎図」が劉生の手になるものであることの傍証ともなる。

劉生は、おそらくは伊上凡骨によって刷られたこの口絵を見ることはなかった。年記からこの作品は昭和4年6月に描かれたことが分かるが、この年の12月20日に満州からの帰途立ち寄った徳山で客死しているからである。

V

最後に、箱書きの署名5文字は「介山居士署」であろうということを書家の中島唯一氏にご教示いただき、またそ

れがおそらく介山その人の筆跡であることを、羽村市郷土博物館の宮沢氏からご教示いただいた。急ぎ足で、木村氏からの寄贈図書の最初の恩恵について記したが、いずれまた機会があればこのことについて詳述したい。

愛知県美術館長 牧野研一郎



図1



図2



図3